

広島大学長メッセージへの質問状

2021年3月3日

2021年2月16日付「学長メッセージ」（以下「メッセージ」）は、広島大学に働く教員にとって、大きな驚きでした。なぜならば、「メッセージ」には文部科学省の「成果を中心とする実績状況に基づく配分」に関して、「《研究指標に係る順位》が特に芳しくない」と記されていたからです。

「メッセージ」では「約2.9億円の減額」の原因として本学教員の研究活動の努力不足を非難し、予算節減の「痛みを共有」せよと迫っています。このことは、本学教員の力量の向上を直視せず、信頼もしないだけでなく、この間の国内外の大学ランキングにおける本学の地位低下の原因を、ひとえに教員に転嫁することを意味しています。めざすべき方向は研究活動をいかに推進させるかということであり、現在提案されているような給与制度（「大学教員の新たな教員個人評価制度（案）」）や人事制度（「教員人事制度の一部見直しについて（案）」）ではありません。

過去数年間、研究環境が悪化する中でも本学教員は健闘してきましたが、今や他大学の研究者と競争するにはあまりにも不利な状況に置かれています。

教員の学問的生産性は、①教員人事をSCI論文数や引用数などの「数字」に引き付けて、候補者の質や学問的潜在能力は脇に追いやられ、②若手教員は専門分野を考慮されずに、英語論文の生産のみを強要され、③さらに若手教員は非現実的な昇進条件の重荷を課せられ、本学に残って同僚と協力して働き続けようという意欲をくじかれることで、ことごとく破壊されてきました。危機はさらに進行しています。

現状が放任されれば、危機はさらに深化し、後戻りができず、本学は枯れ果てていくしかありません。組合は現状打開・危機突破にむけて、学長につぎの三点をお尋ねします。明確な回答をお願いします。

（1）「メッセージ」には本学の危機脱出の「一番の近道」として大学構成員が「一丸」となることを求めています。現在、大学執行部が進めようとしている諸改革（給与制度、人事制度）は分断と格差を進めるものです。基本的な方向性を変更するお考えはありませんか。

（2）「成果を中心とする実績状況に基づく配分」に関して広島大学は「重点支援③」の16大学の内の1校ですが、学長がご指摘の通り、この16校の中では本学は低位にあります。今後、第3期中期目標期間が終わり、第4期中期目標期間が始まる際に、研究大学の枠組み「重点支援③」から外れた場合は、どのようになさるおつもりでしょうか。

（3）「第4期中期目標期間における広島大学のあるべき姿（案）」において「世界大学ランキングトップ100」というゴールが消えましたが、本学の「理念5原則」に基づき、それに代る具体的なゴールを第4期中期目標に掲げるのかどうかお考えをお示しください。

以上三点に対して、2021年3月16日までにご回答をお寄せ願います。

私たち広島大学教職員組合は、学長が本学教員を信頼し、教員の働く環境を改善するお考えがおりかどうか、衷心よりお尋ねする次第です。

広島大学教職員組合
執行委員長 河西英通